

(続紙 1)

京都大学	博士（情報学）	氏名	太田 敏一
論文題目	大災害後の復興計画策定過程に関する研究		
（論文内容の要旨） 本研究は、阪神・淡路大震災後の神戸市復興計画策定に自ら中心にかかわった経験を元に、復興計画策定過程にとって重要な手順や要素について体系的に抽出し、さらにそれらの要素に対してハリケーン・カトリーナにより大きな被害を受けたニューオーリンズ市の復興計画策定過程との比較を行うことにより、それらの要素の持つ意味をより深く解明することを通じて、復興計画策定過程における重要な要素の抽出を行ったものである。 1）復興計画に関する既往研究、文献のレビュー 研究の前段階として、これまでの復興計画策定に関する研究のレビューを行った。その際、総括的レビューとして、国立情報学研究所に登録され自由閲覧可能な全論文および都市計画学会論文データベースの全論文について総括的なレビューを行った。 また、実際の大災害後の復興計画の事例や、阪神・淡路大震災後に行われた復興計画に関する取り組みや研究の進展をレビューした。これらのレビューの結果、阪神・淡路大震災以前は、復興計画は国の法的根拠のない対象であったことが明らかにされるとともに、復興計画策定過程に関する研究は、まだほとんどなされていない重要な分野であることが明らかとなった。 2）復興の定義及び復興計画の必要性 続いて大災害からの復興の定義と意義、復興計画の必要性や目的について整理をした。特に、大きな災害からの復興は、単に元に戻す復旧では成し遂げられないこと、また、市民生活の再建のためには幅広い分野の複雑な過程を示す復興計画が必要であることが示された。 3）神戸市の復興計画策定過程のプロジェクト・マネジメント手法による分析と検証 以上の準備の上に、阪神・淡路大震災での自らの経験をプロジェクト・マネジメント手法で掘り下げ、整理し、評価する研究を行った。この際、筆者一人ではなく、立場の異なるさらに2名の研究者の参加を得た「検証の窓」による相互主観的評価を行うことにより、より科学的で客観的な検証が行われた。検証は、実際の復			

復興計画策定の作業をプロジェクト・マネジメントの手法で個々の要素に分解して振り返り、それぞれの要素について検証の窓による評価が行われた。これにより神戸市の復興計画策定過程における重要な11の要素が抽出され、それらが検証の窓により評価された。

4) 神戸とニューオーリンズにおける復興計画策定過程の比較

続いてそれらの成果を元に、ハリケーン・カトリーナで大きな被害を受けたニューオーリンズ市と神戸市の復興計画策定過程の比較研究を行った。ニューオーリンズはハリケーン・カトリーナにより大きな被害を受け、その直後から、復興計画の策定に取り組んだものの、いくつかの試みが失敗し、結局公式な復興計画の策定には、2年という長い歳月が必要であった。ここでは、前章の研究で抽出した11の要素を5W1Hで再構築したうえで、各々の要素について神戸市とニューオーリンズ市での比較を行った。それにより、一部、よく似た要素の存在と、非常に対照的な要素の存在が確認できた。これらの比較研究により、復興計画策定にとって重要な要素や手法の研究がさらに深まった。

5) 復興計画策定過程にとっての重要要素のまとめ

以上の研究を踏まえて、大災害後の復興計画策定において重要な要素を抽出し提示した。これらの要素は、神戸とニューオーリンズの二つの特徴的な市の復興計画策定過程の研究から抽出されたものであり、どこの都市でもすべて当てはまるとは言い切れないものの、実務的な過程を科学的に分析評価して抽出されたものであり、今後の大災害後の復興計画策定においての有用な情報として参照され得るものである。

(論文審査の結果の要旨)

本研究は、阪神・淡路大震災後の神戸市復興計画策定に自ら中心的にかかわった経験を元に、復興計画策定過程にとって重要な手順や要素について体系的に抽出し、さらにそれらの要素に対してハリケーン被害後のニューオーリンズ市の復興計画策定過程との比較を行うことにより、それらの要素の持つ意味をより深く解明することを通じて、復興計画策定過程における重要な要素の抽出を行ったものであり、実務的経験を科学的に解明し、今後の復興計画策定で参照されうる重要な成果が示された。

本研究の成果は、

1) 研究の前段階として、これまでの復興計画策定に関する研究のレビューを行ったが、その総括的レビューは、2000文献以上を対象とする極めて画期的なものである。これらのレビューにより阪神・淡路大震災以前は、復興計画は国の法的根拠のない対象であったことが明らかにされるとともに、復興計画策定過程に関する研究は、まだほとんどなされていない重要な分野であることが明らかとなった。

2) 続いて大災害からの復興の定義と意義、復興計画の必要性や目的について整理をした。特に、大きな災害からの復興は、単に元に戻す復旧では成し遂げられないこと、また、市民生活の再建のためには幅広い分野の複雑な過程を示す復興計画が必要であることが示された。

3) 以上の準備の上に、阪神・淡路大震災での自らの経験をプロジェクト・マネジメント手法で掘り下げ、整理し、評価する研究を行った。この際、筆者一人ではなく、立場の異なるさらに2名の研究者の参加を得た「検証の窓」による相互主観的評価を行うことにより、より科学的で客観的な検証が行われた。これにより、神戸市の復興計画策定過程における重要な11の要素を抽出され、それが検証の窓により評価された。

4) 続いてそれらの成果を元に、ハリケーン・カトリーナで大きな被害を受けたニューオーリンズ市と神戸市の復興計画策定過程の比較研究を行った。ここでは、前章の研究で抽出した11の要素を5W1Hで再構築したうえで、各々の要素について神戸市とニューオーリンズ市での比較を行った。それにより、一部、よく似た要素の存在と、非常に対照的な要素の存在が確認できた。

5) 以上の研究を踏まえて、大災害後の復興計画策定において重要な要素を抽出し提示した。

以上の研究で示された復興計画策定過程、および各要素は、実務的な復興計画策定過程から初めて科学的に抽出されたものであり、今後の大災害後の復興計画策定においての有用な情報として参照され得る極めて価値あるものである。

よって、本論文は博士（情報学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成22年10月18日に論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。